

# 神奈川県演劇鑑賞団体連絡会

## 第14回総会討議資料

2013年度

### 《総会次第》

開会  
来賓挨拶  
議長団選出  
2012年度活動報告  
2012年度財政報告  
2012年度会計監査報告  
質疑・討議  
採決  
(休憩)  
2013年度活動方針(案)提案  
2013年度予算(案)提案  
名称変更及び規約改正(案)の提案  
質疑・討議  
採決  
(休憩)  
「川崎さいわい市民劇場」「川崎市民劇場  
なかはら」の分離独立と新規加盟の提案  
役員の選出  
質疑・討議  
採決  
議長団解任  
閉会

### 《討議資料目次》

- この1年間を振り返って
  - はじめに
  - 理念に基づくブロックへの結集と  
相模原・横浜の退会について
  - 組織状況から見る課題認識
- 1年間の活動の検証 ～活動方針に沿って～
  - 理念を実現していくために
  - 運営サークルを鑑賞運動の本流にした  
活動を進めるために
  - ブロックの運動を充実させるために
  - 財政の健全化に向けて
- 各地演劇鑑賞会の報告
  - 厚木演劇鑑賞会
  - 海老名演劇鑑賞会
  - NPO法人鎌倉演劇鑑賞会
  - 川崎市民劇場
  - たま・あさお市民劇場
  - NPO法人茅ヶ崎演劇鑑賞会
  - ひらつか演劇鑑賞会
  - NPO法人藤沢演劇鑑賞会
  - 横須賀演劇鑑賞会
- 「川崎さいわい市民劇場」「川崎市民劇場  
なかはら」の分離独立と新規加盟の提案
- 名称変更及び規約改正(案)の提案
- 2013年度活動方針(案)
- 加盟団体一覧

◆別紙＝ 2012年度組織動態表・規約改正(案)

【日時】2013年10月20日(日)

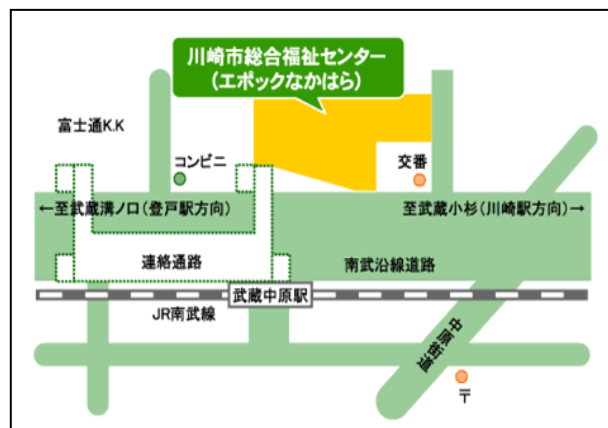
10:30 受付開始  
11:00 総会開会  
17:00 総会終了予定

【会場】エポックなかはら

7階 大会議室

JR南武線「武蔵中原駅」徒歩1分  
(改札口を出て右側の連絡通路利用)

電話：044-722-0185(代表)



# 1, この1年間を振り返って

神奈川演鑑連事務局長：溝口鉄也

## (1) はじめに

昨年12月の衆議院議員選挙で政権与党に  
返り咲いた自民党を中心とした現政権は、  
「アベノミクス」という大企業優先の経済政  
策を推進し、マスコミからは株価やGDP  
(実質国内生産)の回復傾向によって、景気が  
上向きつつあるかのように喧伝されていま  
す。しかし、我々一般庶民の暮らしは一向に  
向上しないばかりか、消費税率引き上げへの  
不安に迫られています。さらには、原発再稼  
働や憲法まで書き換えてしまおうという、国  
民の多数が願う方向とは逆行する動きが報  
じられる度に、先行きの不透明感と不安感で、  
ますます混迷は深まるばかりです。

「喉元過ぎれば熱さ忘れる」の例えのよう  
に、原発事故のその後の状況や、先の震災に  
よって被災した東北地方の復興状況の報道  
はめっきり少なくなり、記録的な酷暑の中  
でも電力の供給は知らぬ間に確保され、ビル  
や電車は寒いくらいに冷房が効き、街には野  
菜や果物もあふれ、まるで何事もなかつた  
かのようです。復興庁のデータによれば、今  
年8月の時点で、福島県ではいまだに9万  
人を超える避難者が自宅に帰れないままだ  
というのに、政府は原発の再稼働を優先し  
ようとしています。人は弱い生き物です  
から、自分に都合の良い情報だけ取り込  
み、都合の悪いことは忘れるものなの  
かもしれません。しかし、米軍基地を  
押し付けられる沖縄への視線もまた  
そうであるように、小さき者弱き者  
である私たちこそ、お互いの痛みに  
敏感であろうとする気持ちや視  
点が大切なのではないで  
しょうか。

そもそも「新劇運動」と呼ばれた演劇表現  
の志しにこそその「種」があり、私  
たちの鑑賞運動も、時代に流され  
ない生き方を大切に  
するというDNAを受け継いで  
いるはずで

昨年私たちが例会に迎えた劇団俳優座『櫂  
の木坂四姉妹』のラストシーンで、故・大塚  
道子さんの物静かな語り  
が観る者の心に染み  
入ってきたように、それは  
必ずしも声高ではなく、  
今を生きる者として共  
に考えようというメ  
ッセージに聞こえます。

大塚道子さんをはじめ、大滝秀治さん、小  
沢昭一さん、木山潔さん、納谷悟朗さんなど、  
私たちが例会にお迎え  
してきた演劇人が、昨  
年度に他界されました。  
改めて、これまで積  
み上げられてきた不  
屈の人生と実績に敬  
意をもって、哀悼の  
意を表します。

商業主義や権力による統制と一線を画した  
新劇運動の精神を、自らの系譜に持つ新劇  
団を中心とした創造  
団体と共に、鑑賞運  
動は発展してきました。  
そして私たちは、こ  
の地域に仲間の輪を  
広げながら、平和で  
文化的な社会の実  
現を願いつつ、「日  
本演劇の民主的発  
展」の一助に、誇り  
をもって参加してい  
ます。この、ささ  
やかでも大切な願  
いを、小さき者弱  
き者の貴重な営  
みを、未来に向か  
って継続して  
いくために、私  
たちは「理念」の  
明文化を果たし、  
理念を実現に導  
くべく5項目か  
らなる実践課題  
(巻末に掲載)を  
掲げ、様々な  
問題や変化に直  
面しながらも、  
この1年の運  
動を展開して  
きました。

今後も、手間暇を惜しまず真摯に  
取り組む姿勢を  
忘れず、常に「理  
念」に「何のため  
に」に立ち返りな  
がら、劇団・創  
造団体への敬意  
と感謝の気持ち  
を忘れずに、共  
に手を携え、  
時に叱咤激励し  
あいながら艱  
難辛苦を乗り越  
えて、ブロッ  
クの、鑑賞運  
動の発展を導  
き出して  
いきましょう。

## (2) 理念に基づくブロックへの結集と 相模原・横浜の退会について

2012年10月に開催したブロック総会において、私たちは数年来の懸案事項であった理念の明文化を果たしました。その上で、“ブロックへの運動体としての結集”を基本に、運動理念を実現に導くための5項目からなる実践課題を掲げました。それは、全国の鑑賞運動の歴史と発展の法則に学び、新劇運動と鑑賞運動とが作り上げてきた歴史と関係性を共有した上で、全ての団体が自分たちの運動を見直し、共通の実践課題に取り組むことが必要だと考えたからです。そして、従来の情報交換を中心とした連絡会的な体質を改善し、次のブロック総会では、改めてブロックに再結集しようと約束しました。

しかしその経過の中で、5月初旬、ブロック総会を待たずに、相模原演劇鑑賞会及び横浜演劇鑑賞協会から「退会」の意思表示がありました。両団体は、自らの組織の考え方や運営方法が、ブロックの掲げる運動方針や実践課題とは相容れないとの判断から、ブロックとは違う道を歩むことを選択したのです。運営サークルを主流とした鑑賞運動のあり方、鑑賞運動の成り立ちや新劇運動についての認識や信頼感の「違い」を、十分に話し合うことで溝を埋めていけなかったことは悔やまれますが、ブロックとしては、方向性の「違い」を認め両団体の選択を尊重することにしました。

事務手続き上は、5月13日開催のブロック代表者会議において、相模原演劇鑑賞会代表者及び事務局長、横浜演劇鑑賞協会事務局長同席の上、「神奈川演鑑連事務局長宛に退会届提出をもって退会を受理する」ことで、合意しました。その後、相模原演劇鑑賞会からは6月20日付けで退会届が郵送され、そ

の受理をもって退会は成立。横浜演劇鑑賞協会からは、報告の必要性から自組織の総会終了直後に退会届は提出するものの、ブロックの年度に合わせる形での退会とし、ブロックの期末以降に退会届受理を希望する旨連絡があり、8月末日をもって退会としました。

私たちはこれまで、神奈川県下の鑑賞団体の連絡会として、考え方の違いを容認しあい、互いの組織問題や運営内容には干渉しない緩やかな連帯をもって、ブロックを形成してきました。それぞれが発展している時には、独自の活動を行っていても、大きな問題とは考えていなかったからです。しかし、ブロック全体の会員減が進む中、有効な手だてなく後退していく組織と、少しでも前進を目指して最善を尽くそうとする組織とに分離し始めました。そこで、理念を明文化し、実践課題を明確化し、共に運動体として成長していく重要さに気が付いたのでした。その意味では、今回の顛末の中で、ブロック内に存在した「相容れない考え方」が浮き彫りとなり、改めて運動の方向性の違いが自ずと整理されたと言えるのではないのでしょうか。

2013年5月開催の全国演鑑連第20回研究集会では、九演連・川述文男事務局長の、「新劇運動を強める方向に頑張り、弱める力には闘う」との意の発言が印象的でした。私たちは理念を明文化することで、全団体が対等平等に、理念に照らして自らの運動を見直し、自らの進む道を選び取った結果、“新劇運動を強める方向”に、改めて再結集する結果になったと言えます。

とは言え、「ひとつの団体も無くさない、ひとつのステージも減らさない」という全国の方針とは逆行する状況で、会員数にして約2,700名がブロックから去った事態を真摯に受け止め、一層の努力と気概をもって、鑑賞運動に邁進しなければなりません。

### (3) 組織状況から見る課題認識

前年度最終例会『フレディ』（横浜・相模原『骨唄』）では、1,708 サークル 11,471 名でした。その後の『檜の木坂四姉妹』（横浜『百物語』）、『アンナ・カレーニナ』（横浜『オバケの太陽』）の2例会は、前例会クリアを達成する団体も多く、大きな後退は見られませんでした。しかし、年明けからの3例会では大きく後退を続け、退会した横浜・相模原両団体の会員数（6月例会時で389 サークル 2,719 名）の減少分も計算すると、ブロックの会員総数は10 団体 1,243 サークル 8,060 名となり、神奈川ブロック単独では例会企画の実現が難しい状況にまで後退しています。またその上に、過半数が会員数700名以下の小組織となり、4 団体が5 例会となっています。昼夜2ステージを常時開催している団体は鎌倉と川崎（中原）の2 団体のみとなって、私たちの観劇条件の悪化もさることながら、劇団・創造団体には大変な負担を強いる状況となっています。この状況を改めて認識し、ブロックとして課題を共有し、回復を図っていくことがブロックに課せられた急務と言えます。

前例会クリアの状況から団体別に見てみると、まず、昨年8月例会から1度も前例会クリアを達成できなかったのは厚木・ひらつかです。その因果関係を確実に立証することはできませんが、昨年の総会でも議論のポイントとなった「独自の運営システム」が存在する2つの団体が、1度も前例会クリアを達成できなかったのは、ただの偶然とは言い切れないかも知れません。

厚木は、会費が引き落とし制であることと、「振替券」という独自の制度が「必要なものは全て持ち寄る対等平等な関係」という意識を希薄にしていないかが、主な議論のポイン

トでした。その後、厚木の役員会でも議論され、サークル懇談会等でも会員との話し合いを始めたようです。ただし、ブロックからの指摘を「会員数を減らしているからやめた方が良い」と誤解してはいないでしょうか。例えば会員数を伸ばしていたとしても、ブロックの理念と実践課題に照らして、独自の制度は改めるべきとの投げかけは、やめることはないでしょう。財政状況の悪化によって統一例会への参加本数が限られる状況をどう解決するかと共に、厚木の役員会のみならず、引き続きブロックでの議論が必要です。

ひらつかは、「輪番的役員の選出方法」という独自のシステムが、自主性・自立性を阻害しないか、昨年の総会での議論のポイントとなりました。4月に開催したブロック活動交流集会の報告団体として、詳細な説明を受けたことによって、単なる「お当番」ではないことは分かったとはしているものの、やはり任期2年で交代していく役員がいることで、運動の継続性が担保できるのでしょうか。また、任期2年を役員自身の心の中で言い訳にしていないでしょうか。緊急対応で窮地を脱した以上は、基本に立ち返ることも可能なはずですが、小手先の対応ではなく、基本に忠実に地道な運動を継続していくことこそが組織の足腰を強くするという事は、鑑賞運動の歴史からも明らかです。引き続きブロックとしての議論が必要です。

前例会クリアが1例会にとどまったのは海老名・川崎（中原）・横須賀。からくも2例会で前例会クリアを達成した川崎（幸）も、会員数・サークル数共に後退しています。

海老名は、会場問題に端を発した厚木との合同例会に終止符を打ち、今後は海老名の例会場に責任を持って運動を展開していこうと、役員会が覚悟をもって決めました。運営

サークルでの目標の持ち寄りの提案においても、その覚悟と勇気と最後まで諦めない気概をもって、運営サークルの取り組みの充実と検証の強化が必要ではないでしょうか。

横須賀は、一時は700名台にまで回復したものの、その後再びの後退によって600名台を割り込む危機に直面しています。運営サークルのクリア率が低く、また財政的にも累積赤字の多さから組織運営に不安を残しています。まず役員会が情勢に負けることなく前向きな意識を持つと共に、運営サークルでの課題共有に向けて、それぞれが当事者意識をもった取り組みをイメージし、それを具現化することが大切です。

幸会場・中原会場それぞれが、自立・独立する準備の年となった川崎は、これまでの運動の総点検を活かしきれず、前進を作り出すには至りませんでした。組織の機構が多重構造となっていたことで、ブロックに向きあう運動を構築しにくかったことへの反省と、何より自分たちの例会場に責任と愛着をもって運営サークルを中心に運動の前進を作り出す体質へと進化していくこと、お世話型の体質から脱却していくことが、今後の展開の中で求められています。

そして、これまでブロックの中でも先駆的な役割を果たし、牽引力となってきた鎌倉・藤沢の後退が目立ちます。

鎌倉は、年明け例会からの退会数の増加もさることながら、年度末の『ブンナよ、木からおりてこい』例会を除き、入会数の減少傾向が見られます。第1回運営サークル会からの目標の持ち寄りを充実させた取り組みと、運営サークルのクリア率の高さからも、ブロックを牽引してきた先駆者として、この課題克服に取り組んでいくことが必要ではないでしょうか。

藤沢は、2011年6月例会『あなまどい』以降、2013年の年明け例会『夢千代日記』までの連続前例会クリア達成が、11例会で途切れてしまいました。藤沢が自ら分析するように、これまで退会数の少なさに支えられてきた前例会クリアの実態を、運営サークルでの入会数の多さによる前例会クリア達成へと進化させるためには、役員会での検証と課題共有が、反転への鍵を握っているのではないのでしょうか。

茅ヶ崎は年明けの2例会でクリアできず一時会員数を減らしたものの、6月例会『どろんどろん』8月例会『ブンナよ、木からおりてこい』の連続クリアで、前年度最終例会『フレディ』を超える会員数となり、サークル数クリアも続けています。ただし、新サークルでの入会が少ないことや、根分けの問題など、課題は山積しています。数値のみならず、その内容に至るまできめ細やかな検証と課題共有が大切でしょう。

そして今年度から正式加盟した、たま・あさおは全ての例会で前例会クリアを積み重ね、ゆっくりとした歩みながらも、着実に会員数を伸ばしつつあります。十分な費用手当てができない中で、懸案だった専従事務局長を置くことを決めました。それだけに、伸び悩んでいるサークル数の拡大と、設立時からの継続目標である会員数450名を早急に実現することが求められています。

このように、全体的に後退傾向にある中でも、取り組みによって前進・反転を生み出す団体があります。だからこそ、各団体の運営サークルの実践内容、その成果と課題、事務局・役員への参加姿勢等を検証し、課題を抽出して改善策を立て、ブロックとしての点検と共通課題化を進めていけば、この低迷した状況を打破することも可能なはずですよ。

サークルについても触れておく必要があるでしょう。前年度最終例会『フレディ』から2013年6月例会『どろんどろん』の時点までのサークル数を比較すると、サークル数を増やしているのは、たま・あさおと茅ヶ崎の2団体だけです。その他の団体は、全てが基礎単位であるサークル数を減少させました。全体として新サークル作りは進んでおらず、未サークルのサークル化も進んでいないようです。

未サークルの構成比率を見てみると、2013年6月例会『どろんどろん』の時点で、横須賀(36.4%)、ひらつか(33.6%)、海老名(31.8%)の3団体が、全体に占める未サークルの割合が多く、次いで厚木(28.3%)、川崎(23.7%<幸=25.9%・中原=22.4%>)、たま・あさお(20%)となっています。

逆に、鎌倉(2.8%)、藤沢(8.2%)は未サークルの比率が低く、茅ヶ崎は未サークルはひとつもなく100%サークルで構成されています。これは、運営サークルの目標に「サークル数クリア」を提起し、サークルを増やす方針を大切に活動したことが結実してる証と言えるでしょう。ただし、これまでも課題となっていたサークルの肥大化の問題がいまだに解決されていないことや、根分けのあり方の問題など、多くの課題を抱えたままとなっているのが実態です。

2007年に横浜で開催された全国活動交流集会での、サークルについての実態交流をきっかけに、「サークル入会の徹底」や「未サークルのサークル化」など、サークルの機能を充実させ、サークル数を増やしていく方向性が確認され、「サークル数クリア」をブロックの共通課題として掲げ取り組んできました。

サークルは自主的に集まった会員が話し合い、相談しあい、力を寄せあう鑑賞会の基礎

単位であり、鑑賞会はサークルによって構成される協議体と位置づけられています。サークルは単なる鑑賞会の事務手続き上の仕組みではなく、例会作品を語り合うことで演劇の魅力を深めていくことのできる豊かな広がりをもった「仲間の輪」です。

「サークルの機能」という視点で考えれば、未サークルのサークル化、サークルの充実化も、ブロックとしての重要なテーマです。

運営サークル会に「複数参加」し、サークルの楽しさや意味を共有することで、代われる関係も生まれ、相談できる信頼関係を育み、サークル本来の機能と元気を取り戻し、根分けを話し合える関係をも醸成することに繋がるという認識は、役員間で共有されているでしょうか。各地の運営サークルのまとめ等からは、同じ顔ぶれのみでの参加や毎回違う人が交代で参加しサークル内での情報共有がなされていない等、「複数参加」の中身に課題を抱えている団体が多く、大量退会に繋がるサークルごと退会の多くが、代表者まかせのお世話型サークルであったり、代表者を交代できる関係ができておらず、誰もが参加できる運動になっていない状況が見えています。サークルの充実化というテーマは、ブロックの共通課題として、引き続き改善に取り組んでいく必要があります。

とは言え、これまでも課題認識は共有されても具体的な取り組みの実践については一致が得られないために、結果的にそれが団体間での大きな差を生んでしまいました。この現状は改めなければなりません。自らの意志で学びあい、独自に進めてきた従来の方法を改め、ときに批判も含めて検証しあい励ましあいながら、ブロックとしての前進を生み出す体質作りが、重要な課題です。

## 2, 1年間の活動の検証

### ～活動方針に沿って～

#### (1) 理念を実現していくために

明文化した「理念」を絵に描いた餅にせず、実現へ向けての具体的な取り組みを始めた1年でした。実践課題に基づいての活動方針の中でも、最も大きな課題は、「統一例会」の実現と「上演料算定方法」への取り組みでした。

#### ① 統一例会

統一例会の実現を目指して、2006年から始まったブロックとしての例会企画作りは、試行錯誤の中、毎年見直しを行い、アンケート方式から脱却し、ブロックとして「例会レポーター案」を提案し、サークルとの合意をもとに決定する方法へと移行してきました。

2014年の例会企画作りも、企画資料集「ステージ7号」の作成と共に進めてきました。ブロック内の全ての会員が手にする資料だけに、前書きの部分に「理念」や仕組みに関する記事を書き込み、前年の年間レポーターとして迎えた劇団の方からのメッセージも掲載し、運営サークル会での資料としても役立つよう、紙面の充実を図りました。

統一例会を前提とした例会レポーター案作成に当たっては、「サークルの中にある潜在的な要望をくみ取る」「すでに上演された作品や全国の例会作品の舞台成果を確かめて企画作品を探し出す」という視点を大事にしながら、観て心に残る作品を大切にしようと取り組んできました。

企画候補対象団体は、新劇団を中心とした演劇創造団体に引き続き候補作品の提出をお願いしました。私たちのブロックが新劇運動にこだわるのは、商業主義とは一線を画し、

権力の圧力にも屈することなく創造の自由を守り、一貫して反戦・平和の主張を貫き、高い芸術性と社会進歩のために懸命に作品を創り続けてきた、新劇運動の精神を継承する劇団・創造団体と手を携えていくことこそが、「理念」を実現に導くための根幹と考えているからです。

なお、候補対象とする劇団・創造団体や作品の追加については、毎年ブロック幹事会で議論することにしていきます。このため、今後のレポーター作りの参考のために、この1年の間に、幹事からの推薦があった、地人会新社、音楽座をブロック幹事会にお招きして、その制作姿勢等を伺う機会を設けました。今回即追加とはなりませんでしたが、こうした検討は今後も継続していきます。

ブロックでの年間レポーター実施を継続する中で、「統一例会の実現」の方向性は方針として確認され、実践課題となりました。これまで、統一例会の実現という方針は共有しながらも作品の選定方法で折り合いがつかなかった横浜と、独自の小ホール作品の実現を重要視していた相模原が別の道を歩むこととなり、「統一例会の実現」に一步近づいたと言えます。しかし、例会数の減少や、会場確保等の問題でなかなか全団体揃って例会を迎える状況を作り出すことができません。

財政状況の悪化で、今後統一例会への参加本数が限られてしまう団体もあり、対応を継続して議論しています。財政状況に見合った安価な作品を独自に迎えるという考え方は、「統一例会の実現」という方針を阻害するものです。例え一時例会数を減らしても、ブロック全団体で共に「全例会の統一」を揺らぐことなく目指し、サークル・会員と共に、今の危機を乗り越えていく結集力と勇気を持ち続けましょう。

## ② 上演料算定方法

「上演料算定方法」の研究・学習を進めそれを実現していくという課題をもって、ブロックとして学習に取り組み、具体化に向けて歩み始めました。これは、この1年の大きな成果となりました。

7月28日開催のブロック研究集会では、各構成団体の認識の共有を目標に、まず全役員が、全国演鑑連第17回研究集会で発行された北九州市民劇場・民谷陽子事務局長が書かれた「上演料算定方法」に関する文章を読んで、各地役員会での話し合いと学習を進め、それをもとにブロックとして疑問点や課題点を整理することから始めました。

その中で、①会員が増えない限り取り組めないのか、②劇団にとってどうなのか、③なぜ上演料算定方法が必要なのか、④統一例会が前提なのか、といった疑問点が整理されました。また、導入に当たっての計算式や自組織の損得に目を奪われがちで、「上演料算定方法」に込められた思いや理念の共有には至っていない現状も見えてきました。

そこで、ブロック研究集会では、全国演鑑連の高橋武比古事務局長をお招きし、全国的な視野に立った上演料算定方法に関するお話しに加え、自らが首都圏ブロックの一員として上演料算定方法に踏み出した実践経験なども交えお話を伺いました。高橋事務局長からは、首都圏ブロックも神奈川と同じような状況や紆余曲折がある中で、ブロック総会での「理念」の明文化と方向性の確認から1年後の、2012年には上演料算定方法を導入したことが報告されました。これにより、同じ境遇にある私たち神奈川ブロックも、上演料算定方法実施に向けて一歩踏み出す勇気と力をいただきました。

その上で、各地の役員会の考え方を共有す

るために、認識や理解度の異なる3団体からの報告を受けました。報告をきっかけにした意見交換では、上演料算定方法に込められた思いや理念への理解が深まり、ブロックとしての視野に立って思考する大切さも語られ、上演料算定方法導入への方向性を共有する集まりとなりました。

また、具体的に提示した試行実施に至るまでの行程案にも一定の合意が得られ、2013年度総会での上演料算定方法試行実施の方針化に向けて、その方向性を共有し、1年後の試行実施を目標に据え、そのスタートラインに立つことができました。

とは言え、上演料算定方法に込められた理念や考え方も、これから理解を深めていく必要があります、継続して学習と研究を進めていかなければなりません。

今後、①計算式の確立、②各地算定数の検討と確定、③劇団・創造団体との協議、等、試行実施に向けてより具体的な方式の確立という課題に取り組みます。とりわけ、先に述べた統一例会の問題や、運営サークルの検証と課題共有が重要なポイントとなることから、この課題に対する各地役員会での議論と取り組みを、今まで以上に具体化して進めていくことになるでしょう。

劇団・創造団体と私たち鑑賞団体は、例会作品を売り買いしているのではなく、会員が上演料を、劇団・創造団体が作品を持ち寄って例会を実現する関係だと言われています。劇団・創造団体はここで受け取った上演料をもとに、より良い作品を再生産して再び例会に持ち寄る。その循環の中で、会員数を増やして上演料を増やし、「日本演劇の民主的発展」を導き出すというロマンを、運営サークルと共に共有していけないでしょうか。それこそが、運営サークルにとっての、前進への動機付けとなると考えるからです。



## (2) 運営サークルを鑑賞運動の

### 本流にした活動を進めるために

活動方針では、「サークル内クリア」「前例会クリア」「サークル数クリア」を運営サークルの検証項目として共有し、運動の点検を行うこととしてきました。

私たちがこれから先も劇団・創造団体を招いて例会を実現し続けていくためには、ブロック幹事会と全ての団体の役員会が、目指す発展の方向性を共有し、その実践と検証を通して前進を作り出していく他に道はありません。課題点を確実に共有し、各団体の独自の事情や考え方に固執することなく、思い切って従来続けてきたやり方を変える必要があるのです。しかし、それぞれの役員会が徹底して従来のやり方を白紙に戻すところからスタートできず、方法論の部分的輸入や小手先の対処に留まっている点が問題です。従来との違いが不明確なまま、運営サークルは自主的・自発的な意欲や達成感を得られず、役員の手伝い感やお手伝い感覚を脱し切れない現実。それが、私たちのブロックが運動の前進を作り出せぬまま後退している要因であり、課題と言えます。

これまでも、「運営サークル進捗状況報告表」を作成しながら、それをもとにした各地役員会でのまとめを相互に点検することで、例会への取り組みの差異と課題を明らかにしようとして取り組んできました。しかし、それがいつしか形骸化し、書き入れることが目的であるかのような状態となって、幹事会でも口頭での報告が主となりました。「運営サークル進捗状況報告表」がブロックとしての検証と点検に有効活用できず、また互いの運動に突っ込んだ課題提案や指摘をするような検証や点検には至らず、課題となっていました。

そこで、2012年10月例会『櫛の木坂四姉

妹』から、検証の方法を改善しました。これまで役員が記入していた進捗表や各地役員会でのまとめをもとに、各地事務局長の視点で自組織の成果と課題を抽出し、統一書式の「運営サークルのまとめ共通フォーマット」に記入して、それをもとにブロックの担当幹事が課題抽出と改善点の提案を行い、幹事会でブロックとしての議論の俎上に乗せるというものです。

回を重ねるごとに、それぞれの持つ課題と共通性のある課題とが整理されつつありますが、書き入れたら後は担当幹事にお任せで、各事務局長自らが自組織とブロック全体とを見比べながら検証しようとの機運が希薄なのが気になります。もう一步踏み込んで、運動の点検・検証を充実していくことが、今後の課題と言えます。同時に、各団体でのまとめと分析を充実させていくことと、それをブロックで共有していくことが必要でしょう。

また、2012年6月『佐賀のがばいばあちゃん』例会からは、ブロック担当幹事の発行責任で、各団体の担当役員間の状況報告と励ましあいをもとにした「通信」を発行し始めました。同じ例会を迎えるからこそ共有できる悩みや喜びを伝えあい、ブロックとして例会の成功を生み出す力になることを願って始められた「通信」ですが、これもまた書くことが目的化し、有効活用できていないとの意見も出ています。単に役員間の励ましあいと交流にとどまることなく、運営サークルの元気の素のひとつとできるよう、また共通フォーマットと共にブロックとしての相互の検証と点検の具体的な材料となるよう、今後有効に活用していくための改善と見直しを図っていく必要があります。

### (3) ブロックの運動を充実させるために

2012年度もブロックとして研修・交流に取り組んできました。その中で“ブロックに結集する運動を作り出せなければ、各団体もまた前進することはできない”という理解と認識は、より広がってきました。

2013年4月に開催した活動交流集会では、前回のブロック総会の際に具体的に取り上げられ継続的に議論していくとされた、厚木の「会費引き落とし」、ひらつかの「輪番的役員選出」について、この半年間それぞれの団体でどのように討議され、自らの総会でどのような提案と検討がなされたかの報告を受けながら、各地が取り組んできた「方針に対しての達成状況」を確認しあいました。各地の課題をブロック全体の課題として、鑑賞運動のあり方、役員の役割とからめて、明文化された「理念」を再確認しながら議論を深めることを目指しました。しかし、報告を聞く限り当該団体の中で十分に議論が進んでいるというより、あくまで「ブロックの指摘」に応える受け身的な態度が目立ちます。また、当該団体以外の役員にも「それぞれの自主性を重んじる」という、従来の連絡会的な発想から抜け出せていない状況が残存していて、運動体としてブロックに結集していくというテーマは、今も尚課題となっています。その意味では、ブロック幹事として各地事務局長が果たす役員会との認識共有が、ブロック結集の上で大きな課題です。

また、もう一つのテーマとして、運営サークルでの「目標持ち寄り」を挙げ、特に課題認識のある団体から、不安や疑問も含めて現状の報告を受けながら率直に話し合う中で、「何故目標の持ち寄りをするのか（そこへ踏み込むのか）」、「この共通課題を共有しなければ先へは進めない」ことへの気付きと認識の

共有を目指して話し合いました。

幹事会として、ブロックの会員動態や運営サークルの進捗状況を検証する中で、運営サークルでの「目標持ち寄り」が運営サークルのクリア率に大きく影響している、という認識が共有されてきました。しかし、従来の各団体独自の運営方法のままであったり、運営サークルに対峙する役員会の中に「この会は持ち寄りで成立している」という認識が欠如したままだったりすれば、目標持ち寄りの提案も、運営サークルからは「ノルマ（数）の押しつけ」に見えてしまいます。役員会として、「必要なものは全て持ち寄る対等平等な関係性の会」という認識と実態を改めて共有し、そこにおける役員の姿勢と役割を明らかにしていくことは、最も重要な課題のひとつです。その課題認識の共有という意味では一定の理解を得、いまだ「目標持ち寄り」の提案に踏み込めていなかった団体も、次年度の運営サークルからは、「目標持ち寄り」の提案を実行していくことで一致しています。

2013年7月に開催した研究集会については前段で述べたとおりですが、総会方針を基に取り組まれた研究集会や活動交流集会は、そのつど新たな発見と認識共有の場となって、各地役員会の理解を深める機会として一定の成果を上げています。ただし、これが運営サークルの現場を変える力や、役員自らの参加姿勢、役員会としての鑑賞運動への向き合い方を変えるに至らず、結局は元通りになってはいないでしょうか。従来のやり方に上書きするのではなく、白紙の状態に戻して再度設計してみる勇気が必要です。

#### (4) 財政の健全化に向けて

ブロックの実践課題に掲げた「上演料算定方法の実現」のために、「各单位団体の財政状況をブロックとして把握し点検しあえる関係作りが、ブロックとしての運動体質を構築していく上で重要」との合意から、幹事会及び代表者会議で承認を得た三者によって、各地の財政資料を基に話し合いをもちました。その中で、単位団体の現状がブロックの運動の前進に影響を及ぼす事態になっていることを再認識し、ブロックとして共に考えあう必要性から、財政委員会として、正式にブロックの機関として設置することを代表者会議に提案し、了承されました。

そして、ブロックの運動を前進させるという観点で、単位団体としての課題とブロックとしての課題を整理し、提案を行いました。

単位団体の課題としては、①単年度赤字を作らず、自立財政に役員会・運営サークルが責任を持つ体質作り、②中・長期的展望を持ち、サークル・会員との合意をもとにビジョンを明確化、③ブロックの構成者としての自覚と問題意識の共有、の3点を挙げ、財政の健全化を方針にしていくことを提案しました。

また、ブロックでの検討課題として、まず、単位組織とブロックの関係性についての認識の共有の必要性を提案。①直接的な金銭支援は行わない、②具体的な取り組みを共有しそこから突破口を探る、③創造団体に対し、ブロックとして連帯した運動を展開する、の3点を提案し確認しました。

そして、運営サークルについても踏み込み、役員の提案姿勢と内容、弱点や問題点の克服に向けて改善すべき点をブロックとして探っていくことの必要性を再共有。さらに、上演料算定方法導入を見据えて、①専従事務局長の確保、②再建の道筋を共有（ひとつの団体も潰さない）、③創造団体と共に発展していく

方式の検討、の3点を確認しました。

財政委員会としての具体的な対応としては、累積赤字がありさらに2012年度単年度赤字となった団体との個別協議を提案し、今後話し合いを予定しています。特に、役員会の提案内容と運営サークルの進め方についての検証と、課題の共有にポイントを置き、運営サークルの運動の成果の積み重ねによって、健全財政を生み出していくべく、今後も財政委員会としての取り組みを継続していきます。

ブロックの前進なくして単位団体の発展はなく、各单位団体に自分たちがブロックを構成しているという自覚がなければ、ブロックに前進はあり得ません。これまでは、あえて他の組織の内情にまで踏み込むことなく、まして財政状況となれば聖域のような扱いで、相互に点検しあうようなことは皆無に近い状況でした。しかし、上演料算定方法の具体的な検討に入った今、ブロックとしての財政状況の共有なくして、上演料算定方法の確立はあり得ません。それぞれの団体の財政状況の健全化があつてこそ、初めて「会費を持ち寄る会員数を増やして上演料を増やす」取り組みが意味をなします。その為にも、運動の検証・点検と課題共有が重要となり、相互に踏み込んで議論を尽くすことで、他人事ではなく自分たちの問題となるでしょう。そして、全団体統一で迎える年間レパトリーの意味も喜びも深まっていきます。正に、2011年5月開催のブロック研究集会に首都圏ブロックの軽部文子事務局長をお招きした時に伺った、「全ては理念を中心に据えた同心円上にある」という言葉が明快に示しているのではないのでしょうか。理念の実現に向け、ブロック全体の問題として、励ましあい指摘しあいながら、全ての課題を乗り越えていけるよう、運動の前進を作り出すことで財政の健全化を図り、再建を目指しましょう。

### 3. 各地演劇鑑賞会の報告

#### ◆厚木演劇鑑賞会

##### 1. 組織動態から見た経過と結果

2012年8月『フレディ』までは微増ながらも、前例会クリアを数例会続けてこれたが、『フレディ』で83サークル598名と600名台にわずかに届かなかった事が悔やまれる。600名台になれば、気分的にも明るく前向きな姿を描けていたのではないだろうか。その後、2013年6月『どろんどろん』まで、1例会も前例会クリアができず、最終的には、81サークル560名の会員数で終わっている。

##### 2. 取り組みの成果と分析

限られた財政の中で、いかにブロックの統一例会に参加できるかを検討した上で、海老名との合同例会を行ってきた。確かに厚木会場での1ステージでは観劇条件も良くなく、また高齢化により、例え海老名でも近くて遠いという声もあり、観劇条件の悪化は否めないが、確実に累積赤字を減少させることができた。また、よりよい観劇条件を望むためにも前例会クリアの大切さを、運営サークルの場で丁寧に提案してきたつもりだが、切実にわが事と思うまでに至らないのは、提案の仕方に問題があるやもしれない。

ブロックから指摘されている「会費引落とし制度」も15年が過ぎ、減らさないシステムとして導入したことで、退会数やサークル解散が少ないというのが利点の一つであったが、ここ数例会の退会数の増加やこれまでなかったサークル解散が出てきたことの分析が求められている。一方、入会数の少なさは常に指摘されていたが、特に運営サークルの時に、サークル内クリアを実現するどころか、運営

サークル時に退会者を出すサークルが出てきたのも、ここ数例会の特徴である。

運営サークルの場では、演劇鑑賞会と劇団との関係から、厚木の理念などを多くの時間をとって話し合っているのだが、概念としては共感を得ているのであろうが、実行が伴っていないところに、運営サークルへの提案の工夫が必要と感じられる。

##### 3. 今後の課題

理念も大切だが、まずは500名台という会員数で例会作りをしていくのには、どうしても財政面が際立ってしまうのは当然のことと感じている。そのことでブロックへの統一例会への参加本数が限られてしまう事が、ブロックへの結集の意識が低いと捉えられてしまうのではないかと、幹事会として悩み苦しんでいる。

7月のサークル懇談会で、来年度のレポトリ案の提案についても、例会数の削減、会費の値上げ等々様々な意見がサークルから出された。今後、これらサークルの声に真摯に耳を傾けながら、ブロックとの関係の上にとって、幹事会として厚木えんかんの未来をどう会員へ提案していくのか正念場に立たされていることを、事務局はじめ幹事一人ひとりが共有していくことが今後の課題だと感じている。

#### ◆海老名演劇鑑賞会

##### 1. 組織動向から見た経過と結果

2012年8月147回例会『フレディ』106サークル631名から2013年8月(この期も年間5例会なので8月例会なし・6月例会101サークル587名)までの組織数としては相変わ

らず下降線をたどっている。『アンナ・カレーニナ』104 サークル 631 名（厚木と合同で1ステージ）『夢千代日記』106 サークル 641 名、『隣で浮気?』101 サークル 588 名（合同で1ステージ・年度切り替え・手帳更新）、『どろんどろん』101 サークル 587 名。未サークルは61から47に減少したがこのうちサークルになったのは3サークルのみ。この間1人で入会希望の方はその時の運営サークルに紹介して受け入れ先を探すようにした。また、運営サークルが中心になって声掛けをすると自ずと「ひとり入会」は少なくなってきた。前例会クリアは2月例会の前進座公演『夢千代日記』のみだった。この1年間で入会者数49名、退会者数100名と前期に比べて退会者が増えた。

合同で1ステージが5例会中2例会あり観劇条件が悪くなり、手帳更新時の退会理由トップになり、財政問題（赤字解消）優先の取り組みが裏目に出た結果だと思っています。

## 2. 取り組みの成果と分析

「運営サークルと役員の関係」「運営サークルへの目標の持ち寄り」等のテーマで開催されたブロックの研究集会は有意義な会議だった。

せっかくの研究集会もその後の運営サークルに十分活かされていないのは役員間での共通理解が十分なされていなかった。運営サークルでの「目標の持ち寄り」もこれからの課題で、漠然と「自分のサークルに仲間を迎える」では自分のこととしての取り組みが出来ていないことが分かってきた。

運営委員会として2014年の例会から責任を持って海老名で観ること、自主自立を目指すことを総会に提案し了解を得た。

そのためには運営サークルの取り組みをそ

れこそ「覚悟」をもって当たらなければならない。

みんなで決めたことは「まず私から」「あきらめない」「最後までやり切る」茅ヶ崎から学んだこの3点をもう一度テーマに掲げて取り組んでいきたい。

## 3. 今後の課題

何はさておき運営サークルへの向き合を考えていきたい。委員と会員は対等平等といたつつも、考え方は会員と同じレベルではなく半歩前に行く気持ちで、この会の将来を思い描かなければいけないと思う。私たち運営委員は自信を持って運営サークルに自分の言葉で提案し、会員とともに理解を深めながら前に向かって進むしか道はないだろう。

鑑賞運動には「これで完成」は無い。絶えず前を向いて目の前のお手本をしっかりと見据え進むしか生き残る「道」はないだろう。この「覚悟」が本物かどうか試される1年が始まる。

## ◆NPO法人 鎌倉演劇鑑賞会

### 1. 組織動向から見た経過と結果

この1年、組織動向では2012年8月『フレディ』の205サークル1397人から2013年8月『ブンナよ、木からおりてこい』の203サークル1360人へと、サークル数、会員数共に後退し、厳しい1年になりました。

2011年10月『はい、奥田製作所。』から前例会クリアを8例会継続し、2012年12月『アンナ・カレーニナ』では1426人へと発展しました。が、2013年は一転、3例会連続で後退し、8月『ブンナよ、木からおりてこい』を前例会クリアで迎えたものの、この後退状

況を取り戻すには至っていません。

2012年度(2012.9～2013.8)は退会数が283人で、2011年度(2011.9～2012.8)の退会数221人を大きく超えています。この退会数の増加にはもちろん目を向けなければなりません。それ以上に入会数の減少が目立ちます(2012年度入会数246人/2011年度入会数320人)。

## 2. 取り組み成果と分析

運営サークルの取り組みは、積み重なってきていることを実感します。「日本演劇の民主的発展」という鑑賞会の理念をまず役員自身が自らの思いを語り、具体的な方針実現への提案と合意を進めてきました。「必要なものはすべて持ち寄る」会の仕組みを共有し、「仲間を迎え会員数を増やすことで上演料を増やす」上演料算定方法への理解も深めています。実際に2012年は前例会クリアを続けることで劇団に追加上演料をお渡しできた喜びと達成感は、運営サークルの大きな力になりました。方針実現への実践に向けて、目標の持ち寄りも定着してきています。1運から目標を持ち寄ることで入会の動きが早くなり、具体的な活動を交流するなかで運営サークル会も活気のあるものになっています。また、サークルとコミュニケーションをはかりながら、丁寧に複数参加をつくってきたサークル会では新しい人と連れ立っての参加が増え、新たな出会いや発見の場になっています。

こうした動きの中でサークル内クリア率が増え(2012年度平均55%)、また複数の入会を迎えるサークルが増えてきたことで全体の入会をおしあげ、前例会クリアの継続につながりました。

## 3. 今後の課題

一方で2013年年明け例会から3例会連続での後退に目を向けなければなりません。これまで「サークル内クリア」をサークル自身の課題として取り組み、結果としてその先の前例会クリアを目指してきました。退会数の多い今年、上演料算定も含め前例会クリアの意味を運営サークルで共有していくことが必要です。

複数参加の固定化も新たな課題です。複数参加率は常に60%を超えていますが、実際の参加率は2012年の平均45%に対し、2013年にはいつてからは36%にとどまり、一部の人の活動になっていることが伺われます。新しい代表者が生まれず、サークル作りが進まない要因のひとつかもしれません。

サークル数はこの1年、数字上ではほとんど変化はありませんがサークルの肥大化はすすんでいます。運営サークルではサークル内クリアとともに、サークル数クリアへの取り組みも進めていますが、実態は個別のサークルの対応にとどまっている状況です。大きなサークルから3人、4人と抜けていく状況も目立っています。あらためてサークルの役割に目を向け、運営サークルでの経験交流を重ねながらサークル作りにも向かっていきたいと思えます。

### ◆ 川崎市民劇場

#### 1. 組織動向から見た経過と結果

311サークル2065名でスタートした組織は300サークル1918名と、-11サークル-147名と大変厳しい年となりました。会場別に見ると幸会場では-5サークル-54名、中原会場は-6サークル-93名です。前例会を超えること

ができたのは幸2例会、中原1例会のみで、いずれも後退に歯止めはかけられませんでした。

2013年から「会員数・サークル数ともに前例会を超えて次の例会にバトンタッチする」という方針と共に、具体的に幸会場では1例会に22名、中原会場では30名の新会員を迎える実践課題を加えました。中原では目標の30名以上の新会員を達成できたにもかかわらずそれを超える退会で前例会が超えられない例会が3例会あり、幸では方針で決めた22名以上の新会員を迎えた例会は1例会だけでした。

## 2. 取り組み成果と分析

幸会場では代表者のお世話型サークルが多く、代表者1人参加が圧倒的に多いのですが、呼びかけに応じて少しずつ複数参加は増えてきました。会員歴の長いサークルの会員も運営に参加することで成果を生み、代表者の意識が会員の先に会員がいることを再認識し始めたりしています。30%以上のクリア率を目指すことが課題でこれを超えた例会が4例会あり、そのうち2例会では前例会を超えています。担当の半数以上のサークルから目標は出されますが、クリアできず目標の内容や持ち寄ることの意味が改めて話し合いの課題になっています。しかし、キチンと目標が出されたサークルは着実に成果に結びつくことへの確信ができてきました。しかし、全ての例会で総会で決めた22名に迫っていません。

「何故、観続いているのか」「何のために仲間作りをするのか」について提起し話し合うつもりでスタートするも、この話し合いを十分にする前にどうしても目標を出す話題になってしまう傾向があったり、結果この話し合いがされていないことがあり、「目標を提案しき

れなかった」というまとめで出される例会が続いています。

中原では複数参加は平均57%で、複数参加の成果がサークルの根分けや、新しい仲間を誘うきっかけを作ってきています。中原ではサークルクリア40%を超えた例会が3例会あり、そのうち2例会で前例会を超えています。それ以外は30%に満たない例会が続きました。「何故、観続いているのか」「何のために仲間作りをするのか」についての話し合いが幸会場と同様不足しています。第一回の参加サークルの「やってみよう」という合意を取っていくことができていません。

## 3. 今後の課題

「複数参加」は運営サークルの活性化にはどうしても必要であり、これをどう進め発展させていくのかが課題となっています。いままですら運営サークルに参加していない会員が参加することで、新鮮に受け止められ、さらに成果にもつながっていることが例会ごとのまとめで報告されるようになってきました。また、どうしたら運営サークルが生き生きと取り組めるようになるのか、消極的に参加したサークルも「じゃあやってみよう」という気になって帰れるのか、その合意をどう取るのかが課題となっています。何故増やすかという話し合いとともに、理念に基づき劇団・創造団体と鑑賞会の関係を伝え、「新しい会員を迎える喜び」を実感してもらうことが今後の課題だと思っています。担当した役員に全てお任せではなく、役員会で第一回運営サークル会の到達点をきちんと共有し、それを目指すことが課題です。

2012年の総会でいままでの4会場の財政的になれなかった体質と、会員をお世話していたのではないかという活動の仕組みを大きく

振り返り、自分たちの例会場と財政に責任を持つ仕組みを改めて提案し、2013年8月、2会場の分離独立を成功させる年となりました。

## ◆ たま・あさお市民劇場

### 1. 組織動向から見た経過と結果

この1年も会員数の前例会クリアを全例会で達成し、前年度8月例会『フレディ』の48サークル364名から、今年度8月例会『ブナよ、木からおりてこい』で53サークル385名となりました。

設立年度に比べて退会数が増えてきている傾向にあり、『夢千代日記』ではこれまでで最多の18名の退会がありました。それを跳ね返す力が少しずつ付いてきていることが、嬉しい成果かもしれません。

### 2. 取り組み成果と分析

前年度に引き続き、「運営サークルを本流に」「前例会クリア・サークル数クリアを着実に積み重ねていくこと」を基本におきながら、運営サークル会では「劇団・創造団体と鑑賞会の関係について」「私たちの会は、みんなが自分にできるいろいろなことを持ち寄って活動している会であること」などを話し合ってきました。これらを話し合っていく中で、どの例会でもこれまであまり積極的ではなかったサークルが変わっていく場面があり、参加メンバーが固定化しがちな運営サークルの中でも、根分けによってできたサークルの参加などで、少しずつ新しい顔も見られるようになりました。話し合える場と、情報と、合意があればサークルは変わっていくのだと、委員会の励みになっています。

運営サークルのクリア率は、『フレディ』33.3%『櫳の木坂四姉妹』50%『アンナ・カレーニナ』30%『夢千代日記』20%『隣で浮気?』62.5%『どろんどろん』36.4%『ブナよ、木からおりてこい』36.4%とばらつきが出てしまいました。

サークル数クリアについては、『フレディ』から『アンナ・カレーニナ』まで達成しましたが、『夢千代日記』と『隣で浮気?』で落としてしまい、その後横ばいが続いています。この1年では4サークル増となりましたが、これは根分けと未サークルのサークル化によるもので、新サークルを作ったの入会はありませんでした。

### 3. 今後の課題

2012年度総会で正式加盟を承認していただきました。

ブロックの仲間、劇団・創造団体から多くのエールをいただいたことに改めて感謝をいたします。ここを新たなスタートと思い、更に元気に前向きにと活動を進めた1年でしたが、なにはともあれ、設立時からの継続目標である450名を早急に実現することが一番の課題です。

そして、運営サークルの役割についての話し合いを深め、どの例会でも安定したクリア率を達成すること、「サークル」の意味の共有と共に新サークルづくりをすすめることに今後取り組みたいと思います。

## ◆ NPO法人 茅ヶ崎演劇鑑賞会

### 1. 組織動向から見た経過と結果

会員数の回復状況から、前年度最終例会2012年8月『フレディ』（122サークル905



名)より上演料算定数の見直しを行い、下方修正前の917名に戻した。『櫨の木坂四姉妹』(124 サークル 920 名)『アンナ・カレニナ』(126 サークル 940 名)の2例会では、サークル数・会員数共にクリアを重ね、追加上演料を支払うことが出来た。年明けから、「挑む数」としての上演料算定数を『アンナ・カレニナ』の成果である940名としたが、手帳切り替え以降退会者が多く『夢千代日記』(127 サークル 926 名)、『隣で浮気?』(128 サークル 897 名)と前例会クリアはならず、サークル数のみ増。会員数は800名台に再び後退した。しかし、『どろんどろん』(130 サークル 905 名)『ブンナよ、木からおりてこい』(131 サークル 910 名)では再び前例会クリア達成へと転じ、会員数・サークル数共に増。前年度最終例会『フレディ』の実績を超えることが出来た。ただし、上演料算定数を回復して、追加上演料を劇団に手渡すまでには至らなかった。

## 2. 取り組み成果と分析

『どろんどろん』から「目標を決めて参加」を呼びかけ、第1回運営サークル会に目標を持ち寄った。上演料算定数を最終目標に、茅ヶ崎の独自課題である「毎例会37名入会」など、段階的な目標共有と、その達成の積み重ねが原動力となった。退会者が多くとも、「諦めずに精一杯取り組もう」との提案と合意、「理念」を語り「何故仲間を増やすのか」を再共有するという課題は、運営サークル会での率直な話し合いの積み重ねの中で乗り越えることが出来、サークル数も全例会でクリアすることが出来た。運営サークルでの話し合いの充実が、運動の課題を自分の問題として捉えられる土壌を醸成し、全体の動きを早めることに繋がった。しかし、成果と課題

は表裏一体である。この成果と共に課題を検証し、次への原動力としたい。

## 3. 今後の課題

全例会でクリア率・拡大率共に50%を超えたが、運営サークルの実参加人数は50%に届かず、複数参加の実体は「固定の人が連れ立って複数参加」「交代参加で結果複数」が依然多い。サークルの中にお客様がまだまだ多く、巨大サークルの根分けが進まない原因も「核とその他」の構図が打開されていないことの現れ。根分け・新サークル誕生があっても、役員サークル以外からの新サークル作りの目標はなく、サークル作りを目標と出来るよう、サークルの意味の再共有が必要。また、根分けしたサークルが元のサークルに依存したままだったり、パスサークルとなったりと自立出来ておらず、根分のありかたと実態について分析の必要があり課題。2011年の藤沢との合同例会の際に入会した人の退会が目立つことから、自分達の観劇条件や出演者の知名度に頼った誘い方になっていないか、その中身の分析と、観続ける意味を再共有する必要もあるだろう。「理念」の共有を推し進めながら、中長期的な課題(悲願)である昼夜2ステージの実現を全会員共通の目標として取り組むことも、今後の重要課題と言える。

## ◆ひらつか演劇鑑賞会

### 1. 組織動向から見た経過と結果

この1年間、自分達の会で立てた方針に添って、遂行することなく、運営サークルでの会員増の取り組みは、どの観劇会も前観劇会を上回ることができませんでした。入会者数

も一桁台だけで終わってしまった観劇会は4回もあり、会員数は2012年『フレディ』711名から2013年『ブンナよ、木からおりてこい』で596名と115名もの減少。入会者数は年間で50名しかいませんでした。

## 2. 取り組み成果と分析

取り組みは、参加担当サークルが観劇会をより充実するために運営をしようと言う意識の中から、自主的な発言から会議が3回から4回となり、会議への参加率も徐々に上がってきています。また第2回目以降の日程決めも話し合う様に進めた結果、サークル内会議をして参加もあり、積極的に運営に携わるようになったサークルが増えてきています。また複数参加が当たり前というサークルが増え、その姿勢を学び、サークルで話し合ったという相乗効果がでています。

全ての観劇会で増やすことが出来なかった要因は、何故増やすのかを役員会の中で共有しても、実践となると伝えようとするあまり数字への意識が薄れ「運営担当が方針の実践の場であること」の言葉だけを先行してしまいがちになり、一緒になって話し合う姿勢が出来ずに終えていたこと、思いや考えが一致しないまま、サークルと向き合っていたことが挙げられます。ひとつのチームとなって進めていきたいと思いますと言う言葉は、担当役員自身でもあることの再確認が必要です。方針に基づき前観劇会を越えようという機運があれば十分にリカバリー出来る観劇会もあり、悔しくてなりません。

## 3. 今後の課題

ブロックで確定した理念のもとに、役員会でブロックと向き合うことは共有しあい、総会では理念に添った方針を立てましたが、そ

の先の実践課題に「どのように」取り組む姿勢が出来ずにいます。今後の役員会では話し合いの事項に対して、その場で反復する繊細さと丁寧さを備えて、運営サークルと向き合いたいと思います。そして数字へこだわりを持つことを最重要課題としなければならない事を役員会で共有し、「他」を学び、自分達で活かしていく「向上心」を培う姿勢を持つこと、危機意識をも共有しなければと思います。この1年間会員を増やすことが出来なかった代償は、来年の自分達に跳ね返ってきます。その検証をすることも重要となります。「何のために」をしっかりと討議し、小さき一歩の積み重ねをし、振り返ったら大きな足跡になるように進んで行かなければなりません。

## ◆NPO法人 藤沢演劇鑑賞会

### 1. 組織動向から見た経過と結果

藤沢演劇鑑賞会では、2011年6月『あなまどい』以降2013年2月『夢千代日記』まで、11例会連続しての前例会クリアを達成し、この1年では2012年8月『フレディ』での会員数1127人から2013年2月『夢千代日記』で1146人へと発展してきた。しかし、その後の4月『隣で浮気?』と6月『どろんどろん』の2例会で大幅に会員数を後退させ、『ブンナよ、木からおりてこい』例会を前例会クリアで迎えたものの、8月例会終了時点では1092人で、昨年度の入会実績をおおむね吐き出す形になっている。サークル数も『フレディ』で189サークルだったのが、現在179サークルと後退し、とりわけ4月に5サークル減と6月に7サークル減となっている状態を回復できないでいる。

## 2. 取り組み成果と分析

こうした後退の要因を分析する中で、藤沢の好調を支えてきたのは「退会の少なさ」であったことが明らかになってきた。実際、2012年は161人の入会で、2011年157人、2010年163人と比較しても大きな前進は見られない一方で、退会数は2012年が157人であるのに対し2013年が3例会ですでに108人となっている。まさに退会が少ないことに支えられてきた前例会クリアは、4月以降の4～5%台の退会の前で挫折してしまった。

もう一つの問題は、運営サークルの入会率に劇的な変化が見られない点である。5例会を振り返っても、理事会内で目標とした50%の入会率を達成したのは2013年2月『夢千代日記』『ブンナよ、木からおりてこい』の2例会のみで、30%に満たないことが3例会あった。運営サークルに一体感が薄く、自分のサークルの厳しい実状を報告し、それを聞き合うところで終わっているために、閉塞感を打開する道筋が見えてこないのではないだろうか。

また、サークルを作る意義など、具体的提案の内容と方法についての協議が不足し、運営サークルへ課題として提起する役員会に共通の姿勢が構築できていない。よって、前例会クリアは追求するが、サークル数クリアは後手に回りがちである。

## 3. 今後の課題

運営サークル会で「なぜ会員を増やすのか」という目的意識と、「どのように声をかけるか」という方法論を整理したうえで、鑑賞運動における運営サークルの役割を共有していきたい。退会におびえずくじけない「あきらめない運営サークル」となっていくことで、現状の「低い入会率」は必ず打破で

きると考えている。7月には、役員会としてその方向性を共有するために話し合いを続けている。その共有認識にたち、自分の言葉で運営サークルへ「問題提起」を行うイメージをつかむことが重要だ。

併せて、サークル数の後退が激しい中で、組織の基盤と言えるサークルの意義と役割について役員会としての認識を高め(自分のサークルで実践する役員も増えてはいるが)、それを運営サークルの中でどのように提起するかを共有して行くことが急務である。

## ◆横須賀演劇鑑賞会

### 1. 組織動向から見た経過と結果

毎回の運営サークルでは、前例会クリアとサークルクリアを課題として決めましたが、ここ1年でクリア出来たのは『アンナ・カレーニナ』だけで、他の例会では退会者数を上回る入会数を迎えられず、1年間で約90名減らしてしまいました。2012年11月で700名に復活できましたが、2月例会で50名減らしてしまい650名まで落としてしまいました。入会者数も少なく毎回10名前後で、1桁のときもありました。クリア率も平均で10%前後と低く、運営サークルで増やしていく活動にはなりませんでした。『ブンナよ、木からおりてこい』が終わった時点で、102サークル606名です。

### 2. 取り組み成果と分析

運営サークルになったときにサークルで増やせる目標を持ち寄り、前例会クリアをして劇団を迎えましょうと提案しましたが、退会が大幅に出ると前例会クリアを諦めて、状況を切り開いていくということができませ

んでした。まだまだサークルには赤字だからただ会員を増やせ増やせとしか伝わらなかったことにあります。また退会の要因には平日夜公演が続いたことが退会に繋がりました。例会ごとに増やして観劇会、劇団等を迎える大切さや、会員を増やす意味が運営サークルにうまく伝えられませんでした。

### 3. 今後の課題

何故会員を増やして劇団を迎えるのか。なぜ横須賀で観続けているのかを、ことあるごとに話し合う活動をすることが今後の課題です。それにはまず事務局・運営委員会の意識を変えなければなりません。

財政的にも約900万円の累積赤字があり、運営基金と借入金、上演料の遅延分割でどうにか乗り切っていますが、このままでは、鑑賞会の存続が危ぶまれるという意識は運営委員にはありますが、具体的な提示がサークル会員に出来ないままになっています。これを乗り越えることを会員・サークル、運営委員会で協議して会員を増やして赤字を解消することと、年間6観劇会へ戻すことが今後の課題です。

## 4. 「川崎さいわい市民劇場」 「川崎市民劇場なかはら」 の分離独立と新規加盟の提案

4ヶ所の複数例会場を有していた川崎市民劇場が、2011年6月例会から、宮前・多摩の2会場を休止。幸・中原の2会場に整理統合し、運営を継続してきました。そして、ただ複数例会場であるが故に、財政的な責任の所在が不明確になり、組織の機構が多重構

造となって、ブロックに向きあう運動が構築しにくいことが問題になっていました。そこで、自分たちの例会場に責任と愛着を持ち、運営サークルが中心となって運動の前進を作り出す体質へと進化していこうと、川崎市民劇場は分離独立への準備を進めてきました。

今年8月初旬、幸会場・中原会場がそれぞれ「川崎さいわい市民劇場」「川崎市民劇場なかはら」として設立総会を行い、自立した運営への新たな歩みを始めました。どちらの組織の設立趣旨書・活動方針にも、ブロックの理念と実践課題に真摯に向きあう姿勢が明記され、ブロックと共に鑑賞運動に邁進しようとの強い意思があることから、川崎市民劇場を改め「川崎さいわい市民劇場」「川崎市民劇場なかはら」両団体の、新規加盟を提案します。

## 5. 名称変更と規約改正の提案

### (1) 名称変更の提案

すでに述べてきたように、過去には、単位団体の交流や情報交換がブロックの主たる役割との認識が各単位団体の中に存在し、緩やかな連帯をもってブロックを構成し歩みを進めていた時代もありました。しかしここ数年、全国演鑑連の経験とその積み重ねに学び、また私たち自身の実感の中からも、「ブロックの発展無くして単位団体の発展はない」「運動の前提はブロックである」等の共通認識が生まれ、運動を転換しつつ進めてきた実態があります。そして、昨年度の総会で、「ブロックへの運動体としての結集」を基本に、「理念」の明文化を果たすと共に実践課題を明確化して、従来の「連絡会」的な体質から脱却するべく

活動してきました。

そこで、今後ブロックとしての運動を確固たるものとして構築していく意味で、名称の中にある「連絡会」を改め、全国の多くのブロック、また全国演鑑連がそうであるように、単位団体がしっかりと自立した上で、共通の理念と目的の基に議論しあう中で前進を作り出していく、という意味を込めた、「連絡会議」への名称変更を提案します。

### ※変更案＝神奈川演劇鑑賞団体連絡会議

#### (2) 規約改正の提案

神奈川演鑑連の現行規約は、1994年10月2日に改正されて以来、昨年度の総会において総会開催周期のみ改正はしたものの、実に19年もの間その内容が見直されることなく今日に至っており、この間に私たちが経験と学習を積み重ねてきた運動の形や、神奈川演鑑連の位置付けの認識等、実態とそぐわなくなっている部分も多々あります。そこで、2012年度の活動方針の中に「規約の見直し」を挙げ、検討を進めてきました。以上のような経緯を踏まえ、規約の大幅な改正を提案します。

#### <※規約改正案は別紙参照>

## 6. 2013年度活動方針（案）

#### (1) 理念を実現していくために

①神奈川演鑑連の理念に基づいた運動を展開し、それを実現していくためのあらゆる努力を行います。

②会費を持ち寄る会員の会（会員制）であ

ること、話し合い、力を寄せあうサークル機能の充実（サークル制）といった原則を、歪めることなく徹底します。

③新劇運動の精神を受け継ぐ創造団体と連帯して、年間を通して「期待感を持てる作品」と「観終わって心に残る作品」をバランス良く配置したレパートリー作りを目指します。

④ブロックとしての「統一例会」で劇団・創造団体を迎えます。

⑤「上演料算定方法」への理解を深め、具体的な方式の確立及び試行実施を実現します。

#### (2) 運営サークルを鑑賞運動の本流にした活動を進めるために

①運営サークルは、例会の準備・運営の作業にとどまらず、財政面・会員動態を含め例会の成功に責任を持った鑑賞運動の主体であるとの共通認識のもとに運動を進めます。

②運営サークルは、サークル・会員の自主性・自発性によって進められるものであることを前提に、各団体の活動状況をブロックで検証し、改善を図ります。

③「サークル内クリア」「前例会クリア」「サークル数クリア」をブロックの共通課題として共有し、運動を前進させます。

### (3) ブロックの運動を充実させるために

- ①運動の点検と検証を充実させ、前進を作り出します。
- ②ブロックの活動方針をより具体化していくために、「活動交流集会」「研究集会」をそれぞれ年1回以上開催します。
- ③全国の先進的なブロックや団体から積極的に学び、ブロック・単位団体の運動の転換と活性化を図ります。
- ④引き続き、新劇運動と演劇鑑賞運動の歴史についての学習に取り組み、神奈川演鑑連の未来像を含めて、ブロックでの共有化を図ります。
- ⑤ブロック幹事会として、全団体の財政状況と運動の状況を把握し、解散団体を出さないよう必要な助言・相談・支援を行います。

## 神奈川県演劇鑑賞団体連絡会 加盟団体一覧

|                    |   |
|--------------------|---|
| 厚木演劇鑑賞会            | 〒243-0014 厚木市旭町 5-43-1 三橋パークビル 305        |
|                    | T E L 046-228-9325 F A X 046-228-9349     |
|                    | E-mail atsugi-enkan@ga2.so-net.ne.jp      |
| 海老名演劇鑑賞会           | 〒243-0405 海老名市国分南 1-2-11 ハイッ押田 103        |
|                    | T E L 046-234-2766 F A X 046-234-2766     |
|                    | E-mail enkanebi@ia2.itkeeper.ne.jp        |
| NPO 法人<br>鎌倉演劇鑑賞会  | 〒247-0056 鎌倉市大船 3-6-2 新道ビル 2B             |
|                    | T E L 0467-46-4042 F A X 0467-46-4042     |
|                    | E-mail kamakura-enkan@sky.plala.or.jp     |
| 川崎さいわい市民劇場         | 〒210-0006 川崎市川崎区砂子 1-4-7 エスポアール 202       |
|                    | T E L 044-244-7481 F A X 044-244-7482     |
|                    | E-mail k-kawasakienkan@iaa.itkeeper.ne.jp |
| 川崎市民劇場なかはら         | 〒213-0033 川崎市高津区溝口 2-17-27 エムスタ第4ビル 2F    |
|                    | T E L 044-455-7950 F A X 044-455-7951     |
|                    | E-mail m-kawasakienkan@iaa.itkeeper.ne.jp |
| たま・あさお市民劇場         | 〒214-0014 川崎市多摩区登戸 1845 SHEZ-MOI 205      |
|                    | T E L 044-911-6920 F A X 044-911-6920     |
|                    | E-mail tama-asaoenkan@navy.plala.or.jp    |
| NPO 法人<br>茅ヶ崎演劇鑑賞会 | 〒253-0042 茅ヶ崎市本村 1-9-6 美和 2F              |
|                    | T E L 0467-51-6005 F A X 0467-51-6005     |
|                    | E-mail chigasaki-enkan@lemon.plala.or.jp  |
| ひらつか演劇鑑賞会          | 〒254-0042 平塚市明石町 20-2 ヒカリビル 2F            |
|                    | T E L 0463-24-3265 F A X 0463-24-3268     |
|                    | E-mail h-enkan@ma.scn-net.ne.jp           |
| NPO 法人<br>藤沢演劇鑑賞会  | 〒251-0055 藤沢市南藤沢 8-1 日の出ビル A203           |
|                    | T E L 0466-24-1747 F A X 0466-24-4237     |
|                    | E-mail fujisawa-enkan@rose.plala.or.jp    |
| 横須賀演劇鑑賞会           | 〒238-0006 横須賀市日の出町 1-13 スターホームズ 104       |
|                    | T E L 046-822-5821 F A X 046-822-5825     |
|                    | E-mail sukaen@tim.hi-ho.ne.jp             |

## 神奈川県演劇鑑賞団体連絡会 運動理念と実践課題

### ■運動理念

「神奈川県演劇鑑賞団体連絡会は、豊かな人間性を育む平和で文化的な社会を求め、演劇鑑賞運動を通じて創造団体とともに日本演劇の民主的発展を目指します。」

### ■解説

「豊かな人間性を育む平和で文化的な社会を求める」ことは、「人々の共通の願い」です。その願いを成就していくため、私たちは演劇鑑賞運動を通じて、同じ願いを持つ、新劇運動の理念に基づく演劇創造団体と共に実現をめざします。併せて、行政や商業資本とは一線を画し、市民である私たちが自主的・自発的に手を携え実現への努力を続けることでこそ、「豊かな人間性を育む平和で文化的な社会」が成立するものと考えます。

私たちは、新劇運動と鑑賞運動との出会いに敬意を払い、継続的で民主的な運営に基づく両者の発展を「日本演劇の民主的発展」と位置付け、それをもって「豊かな人間性を育む平和で文化的な社会」の構築にブロックとして取り組んでいきます。

### ■実践課題（理念実現のために…）

1. 全国の鑑賞運動の歴史と発展の法則に学び、会費を持ち寄る会員の会（会員制）であること、話し合い、力を寄せ合うサークル機能の充実（サークル制）などの原則を、歪めることなく徹底する。
2. 新劇運動と鑑賞運動とが作り上げてきた歴史と関係性を共有し、運営サークルを本流とした、サークル・会員の自主性・自発性による運動を確立する。
3. 商業主義を排した新劇運動の流れを汲む劇団・創造団体の作品を中心に、時代を見据え、地味でも珠玉の作品にも向き合い、舞台成果をよく確かめ、「観て良かった」と思える例会企画を作る。
4. 神奈川演鑑連に加盟する全ての団体の発展を導き出すために、会員が同じ例会を共有し、共に取り組むことで内容を検証出来る、神奈川演鑑連の「統一レパートリー」を実現する。
5. 各団体の財政の健全化に配慮しつつ、どの団体に所属していても、持ち寄る上演料が平等となる「上演料算定方法」を研究し、その実現を目指す。